

はじめに

今日、私たちは「SDGsの時代」を迎えている、と考えてよいであろう。SDGsとは、2015年9月に国連総会で採択され、国際社会が2030年までに達成することを目指した持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals) のことである。政府や自治体がSDGsの普及活動に力を入れ、新聞・雑誌やテレビ、家庭に配布される自治体広報にもSDGsの17目標が描かれたカラーのロゴマークをみかけるようになった。最近では多く人の目につき、SDGsの名前とロゴマークは知られるようになったが、その詳しい内容や意義となると、あまり理解されていないのではないかという声も上がっている。

本書はこのSDGsを、世界に平和をもたらす人類最大の目標として位置づけ、平和学の視点から分析しようとするものである。つまり平和学とSDGsとの結びつけをねらっているのである。冷戦時代に誕生した平和学が、戦争や紛争の解明から貧困・飢餓・抑圧・人権などの構造的暴力の解明、地球の諸問題の解決にまで発展していく過程を踏まえながら、今日のSDGs時代にどのような役割を果たすべきなのかについて提示したい。いま私たちは、これまでに体験したことのない強力なパワーをもつ台風やハリケーンにおびえている。同時に、北極の氷が溶解し、南太平洋では海面の上昇により島民が島を脱出するというニュースに接している。これらは地球の平均気温の上昇による気候変動が原因であるといわれているが、温暖化ガスを排出しているのは私たちである。気候変動 (climate change) という穏やかに聞こえる専門用語の代わりに、研究者や環境活動家は気候危機 (climate crisis)、気候行動 (climate action) という言葉を使って緊急性を訴えている。国連SDGsには、私たちが持続可能な社会をとり戻さなければ、人類に未来はないという強いメッセージが秘められている。

本書はただ単に、SDGsの内容を解説しようとするものではない。SDGsの時代背景を検討しながら、その評価や批判を含め現在の実施状況や私たちの課題についても取り上げる。平和学のミッションは、「平和」という価値を基本

に据えて、現状を分析して理論構築を試みることであるが、それだけではない。分析して気づいたことを啓蒙・教育活動につなげ、政策提言も目標とする。読者が本書に書かれている多くのことに気づき、理解を深めることができるように、具体的事例を多く紹介し、概念についてはできるだけ図表化し、ビジュアルに捉えられるように工夫したつもりである。SDGsが何であるかについて知りたい読者は、まず第2章の2節から読み始め、第3章の1節へ読み進むこともできる。SDGsの達成のために何ができるかについて、私たちの生活の場（ローカル）からの活動事例やその思想的背景を理解するためには、第4章を先に読み込むこともできる。

そして、平和学そのものへの理解をしておきたい読者は、第1章を先に読んでから第6章へと飛ぶこともできると思う。また教室やその他で、「持続可能な開発」について理解を深めるワークショップを実施してみたい読者は、筆者が海外スタディツアーの現場で行った第5章の事例を参考にしてほしい。第5章については著作権を開放しているので、参加型の学習会やセミナーで気軽に使用していただいても結構である。関心に合わせて本書を自由に活用してほしいと願っている。なお、本書での平和学の記述は、必ずしも平和学会（界）の一般的な見解とは同一でないことを了解していただきたい。

紙幅の都合で、本書ではSDGsの169ターゲットの全文すべてを掲載できなかったが、幸いにも法律文化社のウェブサイトでその日本語訳全文データを閲覧及びダウンロードできるようになった。実現できたのは『SDGsを学ぶ——国際開発・国際協力入門』（法律文化社、2018年）の編者である高柳彰夫氏と大橋正明氏に快く認めていただいたおかげである。ここに感謝する次第である。